

のせの教育の魅力を伝えていきます

●●●●●  
2026 spring

# 教育長だより

vol. 10

## Main Feature 【地域の伝統をつなぐ】長谷の伝統行事「御田祭（おん田）」

みなさん、能勢の長谷地区にある棚田の景色をご覧になったことはありますか。標高564mの三草山の山麓に広がる棚田は、日本の棚田百選にも選ばれており、日本の原風景ともいえる能勢が世界に誇る美しい里山景観の一つです。

今回は、豊かな春を告げる伝統行事、長谷地区 八坂神社に伝わる「御田祭（おん田）」についてお伝えします。



## Heritage & Hope 「御田祭（おん田）」に込められた意味



「御田祭」とは、「お田植え祭り」のことです。田んぼを作る男と牛が登場し、田起こしから田植えまでの耕作の様子を村人がユーモラスに演じられます。地元の小学生から中学生が田植えをする早乙女として参加し、榊を苗に見立て田植えを行います。

このお祭りは、一年の五穀豊穡を祈り、**未来の幸せを、いま先に祝ってしまう『予祝』**という神事です。長谷の歴史と人々の願いが詰まった、貴重な文化的な遺産（大阪府記録選択、能勢町指定無形民俗文化財）となっています。

## Bonding the Community 全員が主役、全員が継承者。結束を生む「当番制」の神事

「御田祭」の開催日は、毎年5月8日に行われてきました。もともとは旧暦の4月8日、「ようかび（八日目）」の行事として親しまれてきました。

この行事を支えているのは、村の自治会の班による「当番制」です。祭りの当日の朝、村当番が村地の山から「苗」の代用にする榊（サカキ）を切り出し、一人二束ずつ担いで帰ることから神事は始まります。役割を固定せず、班ごとに交代で伝統を背負っていく仕組みが、長谷の結束力を生んでいます。



## Heirs of the Future 学校を離れ、村の主役へ。長谷の伝統が育む「郷土を愛する心」



このお祭りは、長谷区の子どもたちが重要な役割を担っています。かつては特定の年齢の男子のみの参加でしたが、現在は前期課程（1年生）から後期課程（9年生）まで、長谷区に住むすべての児童生徒が参加をしています。

毎年、長谷区長が学校長を訪問され、子どもたちが伝統の継承に関わるための、調整を行われるなど影の苦労が存在します。

**地域を挙げて子どもたちの学びを支える**この姿こそ、まさに能勢らしい伝統的な文化を大切にする教育の原風景といえるのではないでしょうか。

## Spotlight お祭りで演じられる「農作業」

内容	見どころ
畔はつり	ネジリ鉢巻きに腰囊（こしみの）をつけ、キセルの煙草入れをぶら下げた馬子役が、木鋤を担いで「アゼハツリ（畦塗り）」を真似て境内を駆け回ります。
穴（うと）探し	畦を直す馬子役に子ども達が「おっさん、こっちにうとあるで！」とからかいながら追う。笑いの中で地元の特殊な地質を伝える、伝統行事ならではの情景です。
牛と馬子の掛け合い	牛の面をつけた役がカラスキを引いて登場し、馬子の声に合わせて田を耕す仕草を披露。時に牛が反抗して暴れ出す迫力ある演出が、観衆を大いに沸かせます。
早乙女による田植え	早乙女役の子どもたちがサカキを受け取り、田植えを演じます。馬子役が豊年満作を告げる威勢の良い声を上げると、祭りは最高潮の盛り上がりを見せます。
サカキの苗	最後には、お祓いを受けた「サカキの苗」が参詣者にも配られます。これを持ち帰り、各戸の田の水口に立て一年の豊作を願うのが長谷の習わしです。

## Future Heritage 伝統を次世代へつなぐ

お祭りの最後には、お祓いを受けた「サカキの苗」が参詣者にも配られます。これを持ち帰り、各戸の田の水口に立てて一年の豊作を願うのが長谷の習わしです。

昨年私は、数年ぶりにこの御田祭に参加させていただき、区の方にお話を伺いました。

- 「馬子役」「牛役」は毎年、4つの区割りで割り当てられ、交代しながらこの重責を果たしておられること。
- 「サカキ」の準備は、10班に分かれて、これも当番制で行われ、サカキを100本近く準備されていること。

ご苦労を口にされながらも、村の伝統を守る者としての強い「誇り」が満ち溢れた表情をされていました。

いただいたサカキを持ち帰り、自宅の田んぼの入り口に挿したところ、例年より豊作となり家族も喜んでいきます。

少子高齢化が進む中で、このような伝統行事をいかに守り続けていくかは大きな課題です。今の形を、いつまで維持できるのか。村の大人たちと子どもたちが泥臭く交流し、笑い合うこの光景を絶やしてはならないと強く感じます。

今年も私はこのお祭りに参加する予定です。地域の宝である子どもたちが、伝統の重みを肌で感じ、成長する姿をぜひご覧ください。5月8日、ぜひ長谷へ足を運んでみてください。（近隣には駐車場がございませんので、周辺にご迷惑とならないようお願いします。）



うとを埋める馬子役



牛役にカラスキを引かせる馬子役

## Deep Dive 能勢町史に見る能勢の記憶

能勢の各地には、かつて旧暦の4月8日（現在は5月8日など）に「八日日（ようかび）」と呼ばれる大切な行事がありました。これは単なる祭礼の日ではなく、農作業の始まりを前に、お天道様（天道）を地上にお迎えし、一年の豊作を祈る民間信仰の姿でした。

- 天を仰ぐ「テントウバナ」この行事の象徴といえば、庭先に高く掲げられた「テントウバナ（天道花）」です。長い竹竿の先にツツジやシャクナゲ、フジなどの色鮮やかな花を束ねて、天高く掲げました。これは、天から降りてくる神様が迷わないための「目印」であったといわれています。
- 受け継がれる「編笠団子」の味 八日日に欠かせないのが「編笠団子（あみがさだんご）」です。米粉を練って小豆の餡を包み、二つ折りにした形が「編笠」に似ていることからその名がつけました。かつては、この団子を作って家族で味わったり、親戚や近所へ配ったりする習慣が、能勢のどの家庭でも見られた春の風景でした。
- 信仰から地域の絆へ 現在では、この「八日日」の伝統は、長谷地区の「御田祭」などの神事と結びつき、形を変えながらも大切に守り続けられています。
- 日付に込められた「譲れない誇り」 おん田は、かつて旧暦4月8日の「八日日」に行われていた行事に由来します。現代では仕事や学校の都合で祭礼を土日に移す地域も多い中、長谷では「5月8日」という日付を頑なに守り続けてきました。これには、天道様（お天道様）を迎え、農作業の節目を大切にしてきた先祖代々の強い意志が込められています。
- 伝統を支える「村当番」の仕組み 当日の朝、村当番が山から「苗」に見立てた榊（サカキ）を切り出し、一人二束ずつ担いでくることから始まります。役割を固定せず、地域住民が交代で当番を担うことで、長谷全体の結束力が維持されてきました。
- ユーモア溢れる神事の情景 おん田の最大の特徴は、狂言のような滑稽なやり取りを通じて田植えの行程を再現する点にあります。馬子と子どもたちの掛け合い：「今年の畦はかとうて、えらい（しんどい）」とぼやく馬子役に、子どもたちが「おっさん、こっちに穴（うと）あるで！」とからかいながら追いかけます。暴れる牛の迫力：馬子の声に従わず、時に観衆の中へ暴れ込む牛の姿は、祭りを最高潮の盛り上がりへと導きます。早乙女による田植え：朝に用意された榊を田に見立てた地面に立て、田植えを演じます。

かつては特定の男子のみの行事でしたが、現在は長谷区に住む全ての児童生徒が「早乙女役」などの主体者として参加しています。学校を早退してまでも村の行事に加わる子どもたちの姿と、それを調整する区長や学校の連携。これこそが、能勢が誇る「地域共育」の原風景といえるでしょう。

城好会の故田和好先生が、長谷の『おん田（お田植え祭り）』を纏められている資料があります。

是非ご覧ください。→[こちら](#)